世界に羽ばたけ！

富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラム

GIRLS CUP 2019

“世界のパスウェイ（経路）”がここにある!!

『富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラム』がスタートしたのは2016年のこと。“トッププロを目指す女子を応援したい”、富士薬品・高柳社長の言葉から始まったスペシャルプロジェクトは、着実に世界に近づきつつある。

世界が通過点とする大会「プチザス」の重要性

ITFジュニア、ITFシニア、そしてWTAへと駆け上っていくトップへの道。その手前で凌ぎを削る舞台として用意されているのがテニスヨーロッパである。その最強決定戦に出る意義とは!?

プロジェクトが目指す「プチザス」という舞台

テニスのプロ選手になるためには？有名なトッププロたちも、ある日突然、プロとして活躍しだしたわけではない。プロになる過程がある。それこそ、富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラムが目指す『世界のパスウェイ（経路）』である。

「富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラム」は、11歳になる女子選手が対象。メンバーに選ばれると最大3年間、海外遠征などのサポートを受けることができる。現状、ITF管轄のジュニア大会には13歳の誕生日から14歳の誕生日の年の1月にプチザスに出場して、テニスヨーロッパを卒業。その後16歳の年までITFジュニアに出場（17歳ではグランドスラムジュニアのみ出場）し、その後は、ITFシニアに出場してプロとして活躍していくという流れだ。

このプチザスという大会がすごい。言わば14歳以下の“ジュニア世界選手権”というべきもので、ヨーロッパはもちろん、世界中から有力ジュニア選手が出場するのだ。

過去の出場者を見ると、驚きだ。ロジャー・フェデラー（スイス）、ラファエル・ナダル（スペイン）らBIG4、シモナ・ハレプ（ルーマニア）にエリーナ・スビトリーナ（ウクライナ）、アンジェリク・ケルバー（ドイツ）、ガルビン・ムグルザ（スペイン）、コリ・ガウフ（アメリカ）…ある意味、将来のスターの見本市とも言える大会なのだ。

つまり、この舞台に出場できるということは、世界のトップと力試しができるということ。だからこそ、富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラムでは、この大会も一つの目標としているのだ。

齋藤選手がプチザスでどんな戦いを見せるか

そして、そのチャンスが近づいている。チーム2006の齋藤咲良選手が、テニスヨーロッパのU14ランキングで80位前後（2019年7月現在）におり、来年1月の本大会に出場できそうなのだ。また、その大会には昨年の本大会のダブルスで優勝し、目下U12で世界最強と言われるブレンダ（チェコ）も出場すると見られる。対戦が実現すれば名実共に世界のトップと日本のトップの実力差を現す試金石になるだろう。

齋藤選手がそれだけのポイントを獲得できたのは、上のカテゴリーとなるU16の大会で結果を残しているからだ。まず、U16ではU14の最大2倍のポイントを得られる。それもあってU14のランキング上位選手の多くは、U16の大会でのポイント獲得を目指している。またU16の年代になると、有力選手はITFジュニアやシニア大会に移行するため、チャンスが増えるのだ。加えてU14でトップレベルのカテゴリー1とU16で3番目のレベルのカテゴリー3は同じポイントを得られる。だから、上位選手はU16を選ぶ。もちろん、同じ理由で同カテゴリーにチャレンジする選手がいるわけだから、地力の勝利であることはまちがいない。

チーム2006である齋藤選手、木下晴結選手がモチベーションを高めるきっかけとなったのが、最初の海外遠征だった。

帰国後すぐの面談で、2人は『ライバルができた』『目標ができた。勝ちたい』と語り、今までと比べものにならないくらい意識が高まっていたという。

その後、全国選抜ジュニアで日本一となった齋藤選手だが、仮に日本一が目標であり、日本だけで活動していたら、現状のように成長できているかはわからない。日本一になったとしても、その先に「ライバルがいる」「目標がある」からこそ、努力できたはずである。もちろん、木下選手についても同様。前回大会のジュニアオレンジボウルで3位という大躍進を果たしたものの、世界には上がある。だからこそ、齋藤選手と共に頑張ってきているのだ。

来年のプチザスに、齋藤選手が出場すれば日本人女子としては虫賀心央選手、久保杏夏選手以来2年ぶりとなる。齋藤選手の出現が、今から楽しみでならない。

[表①] 若手スター候補のパスウェイ（経路）

プレーヤー	国籍（所属）	誕生月	13歳となる年 プチザス	全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	Jr.オレンジボウル	ITF Jr.ランキング	14歳となる年 プチザス	全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	Jr.オレンジボウル	ITF Jr.ランキング	15歳となる年 全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	ITF Jr.ランキング	WTAランキング	16歳となる年 全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	ITF Jr.ランキング	WTAランキング	17歳となる年 全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	ITF Jr.ランキング	WTAランキング	18歳となる年 全豪Jr.	全仏Jr.	全英Jr.	全米Jr.	ITF Jr.ランキング	WTAランキング	7/22時点WTAランキング
K.スワン	イギリス	99年3月	32	-	-	-	-	○		32	-	-	-	-	○	234			○	○	37		○	○	○	○	3	522		○	○	○	プロ転向	384						300	256
C.ペリス	アメリカ	99年4月	-	-	-	-	-	4	1101	優勝	-	-	-	○	-	127	○	○	○	○	1	254	○				プロ転向	233					75						60	※故障中
M.ボンドロウソワ	チェコ	99年6月	16	-	-	-	-			4	-	-	-	-	準優勝	217	○	○	○	○	12		○	○	○	○	2	399	○				プロ転向	422						67	16
C.リュー	アメリカ	00年3月	16	-	-	-	○	8	789	準優勝	-	-	-	○	優勝	120			○	○	29	564	○	○	○		9	676	○	○			プロ転向	255						141	288
D.ヤストレムスカ	ウクライナ	00年5月	16	-	-	-	-	16		32	-	-	-	-	-	243					40	1113	○	○	○		8	338					プロ転向	188						58	34
B.アンドレスク	カナダ	00年6月	-	-	-	-	-	8	1765	優勝	-	-	-	-	準優勝	332	○	○	○		4	643	○		○	○	37	296	○	○			プロ転向	189						152	24
A.ボタポワ	ロシア	01年3月	8	-	-	-	-	優勝	866	優勝	-	-	○	○	-	23	○	○	○	○	1		○				プロ転向	242						93	2019年シーズン						64
I.スウィアテック	ポーランド	01年5月	-	-	-	-	-	4		4	-	-	-	-	-	164	○	○	○	○	14	847	○	○			29	727	○	○			6	186							61
A.アニシモワ	アメリカ	01年8月	-	-	-	-	-	8	896	8	-	-	-	○	-	48	○	○	○	○	5	765	○		○		8	182					プロ転向	96							23
佐藤久真莉	富士薬品	02年4月	8	-	-	-	-	8	477	4	-	-	-	-	-	151	○				64	1085	○	○		○	78	809	2019年シーズン												848
W.オングウェ	アメリカ	02年4月	16	-	-	-	-		465	-	-	-	-	○	-	111	○	○	○	○	1	1120			○		プロ転向	201													110
M.コスチュク	ウクライナ	02年6月	16	-	-	-	-	優勝	928	優勝	-	-	-	-	-	23	○	○	○	○	2	522					プロ転向	119													199

※○＝出場、4＝ベスト4、8＝ベスト8、16＝ベスト16 ※プチザス、Jr.オレンジボウルは14歳以下のため、15歳以上表記なし。年ごとのランキングは、シーズン最終ランキング

若手スター候補がどのような経路をたどったのかがわかるのがこちらの表。プチザス、グランドスラムジュニア、ジュニアオレンジボウルとあり、多くは14歳の年にプチザスで好成績を収めている。15歳になるとWTAランキングも保持。16位ボンドロウソワ、24位アンドレスクは、プロ転向からわずかな期間でランキングを上げている。この経路を巡り、優秀な成績を収められれば、世界の頂点も見えてくるはず

[表②] 世界のトッププレーヤーの出場試合

	12歳	13歳 ITF Jr.解禁！	14歳 ITF解禁！	15歳	16歳	17歳	18歳
テニスヨーロッパ	100%	80%	22%	1%	0%		
ITFジュニア		20%	71%	81%	41%	13%	
ITFツアー			8%	18%	48%	61%	59%
WTA					11%	25%	41%

テニスヨーロッパ、ITFジュニア、ITFシニア、WTAの4ツアーの出場比率。13歳になるとITFジュニアも同時に挑み、1月のプチザスに出場したらITFジュニアに移行。15歳になると約8割がITFシニア大会を選択。これが世界トップに駆け上がる選手の道筋。富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラムがまず目指すのは「世界のパスウェイ」に乗ることだ

[表③] 日本人トップ選手のITFデビューとWTAランク獲得年齢

プレーヤー	保続	WTAランキング	ITFデビュー年齢	WTA初ランク年齢
大坂なおみ	日清食品	2	15	15
日比万葉	グラムスリー	302	15	15
土居美咲	ミキハウス	82	16	17
日比野菜緒	プラス	130	18	18
奈良くるみ	安藤証券	179	17	17
清水綾乃	Club MASA	235	17	17
尾﨑里紗	江崎グリコ	253	17	17
小堀桃子	橋本総業ホールディングス	259	17	17
桑田寛子	島津製作所	271	19	20
今西美晴	島津製作所	286	16	18
大前綾希子	島津製作所	287	15	15
村松千裕	グラムスリー	303	16	16
岡村恭香	橋本総業ホールディングス	307	17	19
本玉真唯	島津製作所	351	17	17
穂積絵莉	日本住宅ローン	357	15	18
荒川晴菜	アオヤマスポーツ		15	17
			16.57歳	17.36歳

※2019年7月15日ランキング
※アメリカを拠点としていた大坂、日比は計算から除く

プログラム出身プロ第1号

光崎澪（こうざきみお）プロインタビュー

“海外遠征で学び、大会でポイントを得たから今がある”

――プロ生活はいかがですか？

「まず今までやってきたテニスでは勝てないと感じています。圧倒的なレベル差がある。一番は技術面ですが、ジュニアでは感じえないボールの重さも感じています」

――富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラムでの海外遠征はどう生きていますか？

「すごくありがたい時間でした。レッドクレーは日本では経験できませんし、そのプレーの仕方、勝ち方を学べた。海外の選手とどう戦うべきかを学べたことも大きかったです。実力の差も感じていたので、気持ちが強くなれたと思うし、悔しい思いをしたので、頑張ろうと思った。そういったことが、今も役に立っているなと思います」

――現役メンバー、メンバーを目指す選手たちに伝えたいことは？

「海外遠征に行ける機会は、限られたもの。まずは行けるように頑張ること。そして、少しでも練習して海外選手と対戦して実力を上げてほしいです。私も遠征中に反省する中で、プロになりたいと思いました。しっかりやりきれるように頑張ってください」

――日本選手としては、2004年生まれで唯一のランカーですね。

「富士薬品様の大会でワイルドカードをいただき、世界ランキングを得られたことが何より大きいです。もし、あの出場がなかったら、そもそも試合に出られていないので」

――プログラム出身のプロ第1号です。今後の目標を教えてください。

「理想は1年後にWTAランキングで、最低でも500位、400位に入ること。そして少しでもレベルの高い大会に出られるようにしたいです。そして3年以内に、グランドスラムに出場したい。最終的には夢であるグランドスラム達成。そこを目指して頑張っていきます」

富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラム

最速でプロになるために

「世界のパスウェイ」を掲げる富士薬品セイムス ワールドチャレンジプログラム。その裏方として活躍する軍司氏に話しを伺った。

軍司和久
株式会社東急エージェンシー

●富士薬品セイムスワールドチャレンジプログラムの企画段階から活躍。プレーヤーを"最速でプロに導く"だけでなく、日本テニス全体への貢献も踏まえながら、新たな施策を講じる。テニスの他、日本最大のバドミントン世界大会や女子プロゴルフレギュラーツアーなど、様々な競技の世界大会や大規模トーナメントを総合的にプロデュースした経験を持つ。

日本のジュニア育成に貢献するテニス界における公共事業

――改めて、プロジェクト開始のきっかけを教えてください。

「富士薬品・高柳社長から『トッププロを目指す女子を応援したい』とご相談頂いたことがすべての始まりです。その想いに応えるために〝テニス界の公共事業〟と言われるような仕組みをしっかり構築したいと考えました。テニスはお金がかかります。才能があっても、試合にすら出られないこともある。これをスポンサーシップによって解決する仕組みを構築したいと考えました。心強いことに、多くのジュニア選手を日本一にし、世界挑戦に導いてきた（一社）トップアスリートグループのコーチ陣にも参画いただき、持っていたジュニアからプロへの過渡期における最適解を生かすことで、日本国内のジュニア育成に大きく貢献できると思いました」

――こだわった点はありますか。

「私の様々なスポーツ事業を通じた経験を踏まえて見えた疑問は投げかけました。まず〝世界での主流である3セットマッチが、国内であまり行われていない〟ことについて。世界の育成年代における主流は3セットマッチであるという事実がある。世界ではテニスヨーロッパどころか南米選手権でら、U12からすでに3セットマッチを行っています。また、テニスでは育成年代のほとんどがトーナメント方式で行われていることにも疑問を抱きました。実は、サッカー界でも20年以上前に同様の議論があり、今では高校年代最高峰の大会は、10チームによるリーグ戦になっています。

だから、テニスにおいても8ゲームや1セットマッチで1回負けたら終わりという大会フォーマットでは、思い切ったテニスができず、守備的なテニス、いわゆるシコラーを助長するのではないかと感じたので。結果を残さないと評価をしづらいコーチ陣も、将来性を追究した指導は難しいと思われます。こういった疑問を、トップアスリートグループのコーチ陣に投げかけたところ、全面的に賛同頂けました。そうして選抜大会は3セットマッチと予選リーグを導入しました。特に富士薬品セイムス ガールズカップ決勝大会には全国の実力者が集まる。そのメンバーとリーグ戦、3セットマッチで戦えるというのは、仮にメンバーに選ばれなかったとしても貴重な機会になるはずです。一次・二次リーグで計6試合、決勝トーナメントでベスト4まで勝ち上がったら最大10試合。この形式ならば、試合の中でもチャレンジできますし、実力も発揮しやすいので、思い切ってラケットが振れると思います」

――強い相手とリーグ戦で戦える。自分の実力を推し量れますね。

「もう一つご紹介したいのが、プログラムで行うトップキャンプ（全メンバーが参加する合宿）。これは〝天井効果〟を逆手にとったものです。一般的に、ある集団があると、その中で一番下手な子は自分より上手な子と練習するため、劇的に伸びます。一方、一番上手な子はなかなか伸びない。そのため、時間が経つと、一番上手な選手のレベル、いわゆる〝天井〟を上限に、実力が均衡してくるのです。これが〝天井効果〟です。つまり、この天井を高くしてあげれば、その集団に属する選手は自然とその天井に向かって成長し続けられるということになりますよね。そこで、トップキャンプでは、プログラムメンバーが〝天井〟にならないよう、昨年の全日本テニス選手権を制した清水綾乃選手など、プロを複数人招いてトレーニングを行っています。これは、参加した選手の実力を引き上げるだけでなく、各々が所属クラブに戻って〝天井〟になった時に、所属クラブの他のジュニアたちの育成にも寄与できます。プロジェクトメンバーには、普段お世話になっているホームコーチやクラブメンバーに対しても、しっかりと感謝、還元するよう指導していますので、ホームクラブの皆様は快く選手を送り出してくれますし、良い関係値を築けていると思います」

――決勝大会後には、メンバーの選考会があります。重視しているのは、どんな部分でしょうか？

「〝世界で戦う覚悟があるかどうか〟です。さまざまなトレーニングや課題をこなして、心身共に限界に達した状況を意図的に作り、そういった中でも全力で頑張れる選手かどうか、そこを評価しています。みんなが『選ばれたい』『よく見せたい』という中で、見栄を張ったり、スタッフの前でだけ頑張ったりしていたら、厳しいですが、落選となります。自分を偽る選手は、どこかで必ず手を抜く。そんな選手は世界では絶対に通用しませんよね」

――具体的には、合宿でどんなことを行うのでしょうか？

「さまざまなことを行います。まず体力測定は、神経系の専門的測定も含めて総合的に分析します。これは味の素ナショナルトレーニングセンターでも行っているもの。約30年蓄積したサンプルと比較して評価します。そのほかグループディスカッションに座学、作文、食事の場などを通じて、選手のキャラクターを徹底的に観察します。その中で世界を目指す覚悟が見られるなら、第一段階は合格です。ちなみにチーム2007の選手たちは、11歳女子としては過去最高クラスの身体能力でしたし、行動面でも素晴らしかった。シャトルランやマラソンでは、全員が自己ベストを更新しました。また、その日中に終わらなかった課題を翌朝6時から自主的に取り組んでクリアしていました。彼女たちの頑張りを見て、我々スタッフも改めて全力でこのプロジェクトに臨まなければいけないと感じました」

世界のパスウェイを通過する選手の育成が「目標」

――プログラムの最大の目的は「プロの育成」。そのための指標、目標はありますか？

「単にプロになるではなく、トッププロになるためにどうすべきか。そのための指標となるのが『世界のパスウェイ（経路）』です。これは世界のトップ選手がどんな足跡を辿ったかという道標。ここを通過することができれば、必ず同年代のライバルと出会い、切磋琢磨できるはずです。トップジュニアの多くは14歳の年の1月までにテニスヨーロッパ『プチザス』出場を目指します。加えて13歳（の誕生日）からITFジュニアの大会に、14歳（の誕生日）からITFシニアの大会に、出場していきます。前ページに掲載した若手スター候補の足跡を見ると、まず13歳の年か14歳の年でプチザスやジュニアオレンジボウルに出場して好成績を収めていることがわかりますよね。同時に、ITFジュニアで結果を残していき、15歳の年にはITFジュニアランキングで100位以内に到達します。また、このシーズンに多くの選手がWTAポイントを獲得し、世界ランカーにもなっています。前ページの表1を見て頂くとわかりますが、日本のトップ選手と比べると2年以上早いペースなのです」

――11歳からの3年間、テニスヨーロッパ、ITFジュニアでの戦いをサポートする。でも、その後も重要ということですね。

「そのとおりです。日本ではエリート選手でも、ITFジュニアからシニアへと移行するところでつまずいてしまうケースが多くあります。最大の要因は、日本国内でのITF大会の少なさ、そしてポイントがないと予選にすら入れない現状のシステム。出場権を得るためにJTAランキングを上げてもITFに出場しにくくなった現状では、ますます世界のトッププロとの差が離れてしまいます」

――戦いたくても出場も簡単ではない。悩ましい状況ですね。

「そこで『富士薬品セイムス ウィメンズカップ』というITF2万5000ドル大会3大会が生きます。この大会は、自ら進んで世界へ飛び込む勇気のある選手にワイルドカードを与える役目も担っています。一例としては、プログラムOGである光崎澪選手。3大会でチャンスを得て、その後すぐにITFシニア大会に自力で出場。世界ランカーとなりました。2003年生まれの選手が誰も持っていないWTAランキングを2004年生まれで持っていることは特筆すべきことです。ちなみにワイルドカードについては、プロジェクトの主旨を理解し、賛同してくれるジュニアを対象にしているので、あらゆるジュニア選手にチャンスがあります。この記事を読んで立候補してくれるような熱い魂を持った選手の出現も期待しています」

――15歳の年で世界ランカーに！光崎選手は「世界のパスウェイ」に乗ろうとしているわけですね。

「その後、ITF2万5000ドル大会では予選から本戦入り。この数ヵ月でグンと実力が伸びたと思います。環境が人を育てるではないですが、伸び盛りのジュニアにとっては、実力をつけてからではなく先に環境を与えるほうがいい場合もある。選手にもよりますが、可能性のある子たちにはどんどんチャレンジさせたいですね」

富士薬品セイムス ウィメンズカップ
ITF2万5000ドル大会3大会を開催

昨年に続いて、今年も「富士薬品セイムス ウィメンズカップ」を大阪体育大学、甲府、大阪と3ヵ所で開催（いずれもITF2万5000ドル大会）。日本のプロ選手にチャンスを与えるだけでなく、ワイルドカードを有望なジュニア選手に付与。それが、光崎選手の活躍にもつながっている。プロジェクトの選手のみならず、プロを目指すすべてのジュニアにとって非常に大きな存在だ。

チーム2006の齋藤咲良選手。テニスヨーロッパのU14ランキングで80位前後にいる。来年のプチザス出場が見えてきた。その場で、世界トップとの距離感を測りたい

（左）日本代表チームにも選出されるなど、成長著しい小林杏菜選手（チーム2005）。世界への覚悟を見せてほしい
（右）昨年の齋藤選手に続き、全国選抜ジュニア（U12）で優勝した辻岡史帆選手（チーム2007）は今後更なる成長が期待される選手の一人